

# 『撰大乘論』「入所知相分」における総法について

合 田 秀 行

『撰大乘論』における玄奘訳の「総法」、チベット訳の *hdres pañi chos* の概念に着目しながら、「入所知相分」の理解に関わるこの基本概念について考察する。この「総法」に関しては、すでに長尾雅人博士が、『撰大乘論—和訳と注解—』において、詳細な注釈を試みられており、筆者の問題意識もその指摘によつて惹起された。

まず、玄奘訳とチベット訳から、その用例を引用する。

「由縁総法出止観智故、由此後得種種相識智故、為断及相阿頼耶識諸相種子」(五七—八頁)

*hdres pañi chos la dmigs pa hñig rten las hdas pañi shi gnas dan/hag mthon gi ses pa de dan/dehi rjes la(s) thob pa sna tshogs kyi man par rig pañi ses pas/kun gshi man par ses pañi sa bon rgyu mtshan dan bcas pa thams cad spans nas / (D.25a/P.29a)*

「総法を対象とする世俗を超越したシャマタとビパシャナとの智がある。それにより後に得られた種々なる相の(世俗的)識の智

印度學佛教學研究第三十七卷第二號 平成元年三月

との故に、アーラヤ識の種子及び因として俱なるすべてを断じ」ここでは、唯識性証入の見道位における根本無分別智と、それに基づく後得智との発得が述べられているが、それを成立させる根拠は、「総法」を縁ずる出世間的止観である。ちなみに、「総法」は、真諦訳では「極通法」、達磨笈多訳では「通相法」とある。また、以上の三訳は *hdres pañi chos* に対する訳語の相違はあるものの、全体的には、ほぼ一致すると見做しうるが、仏陀扇多訳のみは、玄奘訳の棒線部に相当する部分が「離法念、彼出世間定慧」(五七頁)となっている。これに関しては検討を要するが、その前に、その意味を探るために、還元梵語について確認しておきたい。まず、ラキット博士は、この「総法」を *saṃstīradharma* とし、長尾博士は、それを *saṃbhinnadharmā* と改めようとする。(前掲書、六五頁) *saṃstīra* は *gathered together, collected* 等の意味を有するが、*saṃbhinna* は *joined, combined, mingled* という意味の他に、全く反対の *divided* という意味も有す

『撰大乘論』「入所知相分」における総法について(合 田)

六八

る。漢訳において「分離」(Myuru. no. 6875)と訳されるのは後者の用例である。この他にも *sambhina* の意味内容は複雑であるが、仏陀扇多訳を考慮すると *sambhina* と特定することが適当であろう。また、『瑜伽師地論』をはじめ他の文献において *hdres pañi* は *mistra* の訳語として用いられ、さらに同義語として *sampridita* もあげられる。それでは、仏陀扇多の翻訳意図について、検討してみたい。その一資料として、「入所知相分」から見道位以前、すなわち願解行地にある止観についてを引用する。

「念法義定慧一切時正行及不放逸故」(五三頁)

ちなみに、玄奘訳とチベット訳では、

「緣法義境止観恒常殷重加行無放逸故」(五三～四頁)

*chos dan don la dmigs pañi shi gnas dan/llag mthoñ...* (D.

23b/P. 27a)

「法と義とを対象とするシャマタとビバシヤナとを…」

とあり、止観の最も基本的な構造とその実修態度を明かす。

この場合の法義は、「入所知相分」の冒頭に示されているように、十二部教等の教法とその教法所詮の意義とを表わし、有見の意言分別の対象とされる。これに関連して、『解深密経』の以下の叙述が想起される。

「於如所取尋伺法相。若有龜頭領受觀察。諸奢摩他毘鉢舍那。是名有尋有伺三摩地。(中略)若緣總法奢摩他毘鉢舍那。是名無尋

無伺三摩地」(大正藏十六・六九九中)

これを、仏陀扇多訳と照合すると、法相における有尋伺の止観は「念法義」に、総法を縁する無尋伺、すなわち無相の止観は「離法念」に対応する。従って、出世間の止観たる後者は、もはや一切の法相が遮遺された唯識真観悟入の境位であることから、この部分を「(有相の)法念を離れる」と翻訳したのではないか、という推測が成り立つであろう。

では、「総法」の意味について、さらに掘り下げてみたい。まず、『撰大乘論』の無性釈には以下のように説示される。

*hdres pañi chos la dmigs pa shes bya ba ni de bshin nid kyī  
rañ bshin yin pa(s) theg ba chen po bstan pañi chos thams  
cad bedus te dmigs bañho/gshan du (na) ni dus riñ mo shig  
tu nman par mi rlog pañi ye šes skeye bar mi hgyur ro/(D.  
246b/P. 300b).*

「総法を対象とする」というのは、真如を本性として説示された法を、すべて集めて対象とすることである。さもなくば、いかに時間を要しても、無分別智の生起は成立しない」

ここでは、『解深密経』における総法の定義が踏襲されている。この『解深密経』では、真如に続いて、菩提、涅槃、転依のそれぞれにも随順し、趣向し、臨入するものであり、それが一味性であると説かれる。また、小総法・大総法・無量総法の差別も示されているが、この差別は、瑜伽師の総法

に対する習熟の深浅を表わすものであろう。なぜなら、総法それ自体は、あくまでも真如の一味だからである。さらに、五縁によって、総法を縁する止観が得られるとされる。

「一者於思惟時刹那刹那。融銷一切庵重所依。二者離種種想得染法染。三者解了十法無差別相無量法光。四者所作成滿相應淨分無分別相恒現在前。五者為令法身得成滿故。撰受後後轉勝妙因」  
(大正藏十六・六九九上)

これに関するチベット訳の註釈によって、一部分を補足すれば、庵重 gnas nan len の障礙 sgrib pa を離れる bral ba ことにより、身心 lus dan sems 軽安となり sin tu sbyans pas、種々の想を離れる法喜におこつ chos kyi kun dgah la 歡喜 dgah ba を得る hthob pa とわれており、さらに法光 (dhammāhāsa) chos snan ba を正知 ཡོད་པའི་ཡི་ཤེས་ཀྱི་ཡོད་པའི་ཡི་ཤེས་ yan dag par ことうのは、無量法におこつ chos dpag tu med pa la 極めて善く sin tu legs par 触れるからである reg pahi phyir ro (cf. P. No. 4033, 181a) と述べられている。

以上は、「総法」に関する資料の一端に過ぎないが、これが瑜伽師の究極の境位に決定的条件として関与していることは明白である。長尾博士の前掲書の中に、この状態を「かなり高度に進んだ理解や心境を示すもので、究極のさとりに近い」(六六頁注2)とコメントがある。そこで、玄奘訳の「総」真諦訳の「極通」等を哲学用語へ置き換えてみるならば、普

『撰大乘論』「入所知相分」における総法について(合 田)

遍的 universal という概念に極めて類似していると思われる。『解深密經』における一味性 ekasa という注釈もそれを裏付ける要素であろう。すなわち、一切教法が湧出するところの根源的領域に逢着する。それは、法喜・法光に象徴されるように、明らかに真如との宗教的一体観が介在しており、その体験は、修道者における実践の方向性を規定すると考えられる。

なお、研究発表中に言及した『大乘莊嚴經論』における sampiñchadhama、及び無著造『金剛般若經積論頌』との関連性については、紙幅の制約上割愛する。

- 1 長尾雅人著『撰大乘論—和訳と注解—』下巻、講談社、一九八七年。
  - 2 佐々木月樵著『漢訳四本対照撰大乘論』改訂新版、臨川書店、一九七七年。以下本論中に頁数のみ記す。
  - 3 野沢静証著『大乘教瑜伽行の研究』二三五頁参照。法蔵館、一九五七年。
- 〈キーワード〉 『撰大乘論』、総法、真如  
(日本大学大学院)

掲載されなかった諸氏の発表題目(三)

チベット仏教史年表考 西岡祖秀(四天王寺国際仏教大学)  
請観音經の咒文について 清田寂雲(叡山学院) 湛然の縁起説について 秋田光兆(大正大学) 勝鬘經にみられる「捨身」の思想 水尾現誠(四天王寺国際仏教大学)